

わたしの目には、あなたは高価で尊い。

わたしはあなたを愛している。

だからわたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにするのだ。

説教

預言者イザヤの時代は、兄弟国イスラエルが自分たちの犯した罪のために神さまのさばきを受けてアッシリヤに滅ぼされ、そのアッシリヤがユダのエルサレムにまで攻め入ってくるという暗い時代でした。そのような中で、ユダの民は罪を悔い改めることなく、むしろ神さまに背いて靈媒や口寄せに伺いを立てて神さまに聞くことのない、それ故にただ神のさばきを受けることを待つ以外にはないという、お先真っ暗の時代でした(8:19-22)。

43章の直前42章の後半にもこうあります。「私のしもべほどの盲目の者が誰か他にいようか。...あなたは多くのことを見ていながら、心に留めず、耳を開きながら、聞こうとしない。...この方に私たちは罪を犯し、主の道に歩むことを望まず、その教えに聞き従わなかった。そこで主は、燃える怒りをこれに向け、激しい戦いをこれに向けた。それがあたりを焼き尽くしても、彼は悟らず、自分に燃えついて、心に留めなかった。」

このような罪深い人間に対し、神さまは、さばきの宣告をしながらも、ただ一方的な恵みによって彼らを「贖った(預言的完了形)」と宣言なさいます。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。」(1)「贖い」とは、貧しさのあまり売ってしまった「土地」や「奴隷」を相当の代価を支払って「買い戻す」ことを意味します。この時の時代的な状況で言えば、ユダは罪のために神さまのさばきを受けて一度は滅びてバビロンに捕囚となってしまうけれども、しかし70年後にはペルシャの王クロスによって解放され、その際に神さまは「エジプト、クシュ、セバ」をユダの代価としてクロス王にお与えになることを意味します(3)。そして、このことは、やがて来るべき救い主イエスキリストによる罪の贖いによる救いを指し示すものとなります。すなわち、売られて悪魔の奴隷と化して罪を犯さずにはいられない人間を、神さまが、代価を支払って神さまのものとするべく「買い戻してくださる」ことを意味します。神さまは、悪魔の忠実な奴隷となり果てて罪を犯さずにはいられず滅びを待つ以外にない罪深い人間を見捨てることなく、憐れんで、キリストという代価をもって悪魔のもとから買い戻してくださるというのでした。

神さまはユダの民に言われます。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(4)これはとても嬉しいみことばです。「高価である」と訳される言葉は、「高貴である、価値がある、尊いものとする、(無視せず蔑ろにせず)助ける」といった意味です。「尊い」の訳語の元々の意味は、「(金銀財宝のような重い物をたくさん所有して)重い」で、そこから「尊敬、誇り、栄光」とも訳されます。つまり、神さまの目には、ユダの民は、断じて安っぽい存在ではない、むしろ大切な価値あるかけがえのない存在であり、神さまにとっては誇りであり栄光であるというのです。誰が何と言おうと、神さまにとっては「高価で尊い」存在です。人目にあるいは自分の目にどう映ろうとも、神さまに目には「高価で尊い」存在なのです。何もできなくても、あるいはどんなに罪深くて、たとえあまりに罪深くてこれから神さまのさばきを受けて滅び失せようとしていたとしても、しかし私たちを造られた神さまの目には、「あなたは高価で尊い」、これが神さまのみことばです。

それでは、どうして神さまの目にはどんなに罪深い者も「高価で尊く」見えるのでしょうか。それは神さまがその人を愛しておられるからです。「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」

私が教会に行き始めたのは学生時代です。まだノーベル平和賞を受ける前ことですが、高校の宗教の時間に聞いたマザーテレサの話に、私は強い関心を持ちました。当時最も貧しい生活水準の国であったインドの人々のため

にどうしてこんなにも献身的に奉仕できるのか、それを知りたくて教会の門を叩き、同時に障害者を助けるボランティアをしながら私の学生生活が始まったのです。そうして、教会に通い、ボランティアをしながら、およそ二年余り求道生活を過ごしました。そうする中で、情緒障害の子供たちと接しながら、私は生まれて初めて自分以外の人間の人生について深く考えさせられました。そして、我が子をこよなく深く愛し、我が子のためには本当に自分の全生涯を費やして懸命に子育てをしているお母さんたちの姿を見ながら、私は人間の尊厳について教えられました。当時、ボランティアサークルの学生たちの間では人間の尊厳についてよく議論がなされていました。その中で、共産主義者の人は、人間の尊厳が「労働」にあると主張します。人が猿から進化したのは道具を使って労働するようになったからだというわけです。でも、私は子供たちのお母さんを見ながらそうではないと思いました。たとえどんなに重い障害を持っていたとしても、何も労働ができなくても、その子の母親にとってはどんなものにも代え難くかけがえのない尊い存在なのだ気づかされたのです。人がどう言おうと、世間が何と言おうとも、その子の母親にとっては、目の中に入れても痛くない、どんなに高い犠牲を払っても惜しくない、たとえ自分の人生を使い果たしてもいいと思うほどに、その子はこれ以上ないほど大切な存在なのです。どうしてでしょうか。母はその子を愛しているからです。ここに人間の尊厳があると私は思いました。そして、これが神の愛だとも思ったのです。母が子を無条件で愛する、そのように自分も神さまに愛されている、この自分も神さまに愛され、大切に思われている、そう実感して、無条件で神さまを信じて洗礼を受ける決心をしました。

イエスさまは地上の生涯に於いて余すところなく愛を示されました。病人を癒し、悪霊憑きの人からは悪霊を追い出し、重い皮膚病の人を癒し、死人をよみがえらせ、飢えた者を食べさせ、貧しい者を満たし、呪われた無知な罪人をわざわざ招いて、彼らを教えました。これらはすべて愛によることです。こんな人にまで、こんな所にまで、という所にも神さまの愛が及んでいることを証しされたのです。そして、最後は、呪われた、地獄に墮ちるべき罪人の身代わりになって、ご自分が世のすべての罪を背負って父なる神さまにさばかれて、十字架の上で呪い殺されました。このことは、神さまがどれほど私たち罪深い者を愛してくださったかを示すものです。それは「そのひとりごをお与えになるほど」です。「ひとりごイエスキリストを犠牲にしても惜しくないほど」です。イザヤの時代には「エジプト、クシュ、セバ」を犠牲にして惜しくないほど、と神さまは表現なさいました。その時代にはイエスさまがまだ来臨しておられなかったので、その当時の人々にわかりやすい形で表現なさったと思われる。でも、今やイエスさまが来られた後の新約の時代には、使徒ヨハネを通して、神さまははっきりと「神は、そのひとりごをお与えになったほどに世を愛された」と断言しておられます。私のためならイエスさまを犠牲にしても惜しくないほど、愛されたと言います。ご自身のただひとりの子イエスさま並みに「高価で尊い」ものとして愛して下さっていると言うのです。

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」愛されているから、尊いのです。愛していなければ、全然尊くありません。愛しているからこそ、尊いのです。何もできなくても、欠点だらけでも、罪深くて、不細工でも、神さまにこよなく愛されている存在だからこそ尊いのです。

この神さまの愛を知る時に、人生が変わります。神さまに愛されているので、これ以上何も必要ありません。人から愛される必要もないし、どんなに大きな試練や苦難の中にあっても恐れることはありません。人が自分のことをどう思おうと、どう言おうと、関係ありません。世間から差別されても、後ろ指指されても、批判されても、関係ありません。なぜなら、神さまに愛されているからです。それ以上の評価は必要ないのです。良く言われたら良く言われたでそれで有り難いかも知れませんが、たとえ悪く言われても別に気にしません。なぜなら、私を造られた神さまが、「わたしの目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」と言ってくさるからです。また、大きな試練の中にあっても恐れることはありません。神さまに愛されているのだから、希望があります。た

とえイスラエル、ユダのように打ち砕かれて滅びても、それは神さまのくださる鞭であり、訓練です。より神さまのみこころを行って神さまの道を歩むようにという、より大きな祝福に至るための人生の訓練なのです。神さまに愛されているのにどうしてこういう目に遭うのかということではありません。神さまに愛されているからこそという、神さまに愛されているという大前提の上で降りかかる試練です。これもまた神さまの愛なのです。愛の鞭です。訓練の鞭です。私を鍛えて強いクリスチャンにするための訓練の鞭なのです。

私たちは、この天地を造られ、私たちをも世に造られた、全世界の支配者なる神さまが、この私を愛しておられる、という事実を忘れてはいけません。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。…あなたが水の中を過ぎるときも、わたしはあなたとともにおり、川を渡るときも、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない。…わたしが、あなたの神、主、イスラエルの聖なる者、あなたの救い主であるからだ。恐れるな。わたしがあなたとともにいる。」神さまは何度も何度も繰り返し「恐れるな」と言われます。「あなたが水の中を過ぎるときも、川を渡るときも、火の中を歩いても」とは、何れの場合もイスラエルの出エジプトの際の紅海渡航を指していると思われまふ。それはイスラエルにとって最も大きな試練の時と言えまふが、しかし、その際でも、「あなたは押し流されない。あなたは焼かれず、炎はあなたに燃えつかない」と言われ、「わたしはあなたとともにおり」と言われまふ。だから、何か？「恐れることはない」というのです。「わたしの目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」からです。

私たちは、もしも神さまの愛を知らなければ、地獄です。「恐れ」地獄です。人を恐れ、会社の評価を恐れ、世間の目を恐れ、学校での成績を恐れ、成績が下がったら恐れ、上がっても下がることを恐れ、お金がなければ恐れ、お金があっても恐れ、病気になつては恐れ、事故にあつては恐れ、たとえ何にも災いが降りかからなくても、今は降りかからないけど、これから降りかかったらどうしようと恐れ、死なないように、死なないように、損しないように、損しないようにと、何をしても、どこに行つても、何を見てもとにかく恐れるのです。あれも、これも、どれも、「恐れ」ばかりで、「恐れ」だらけの人生です。「恐れ」地獄です。「恐怖」の人生です。そして、最後は、死ぬという恐怖、死んだ後地獄に行くかも知れないという最大の恐怖で一杯になりながら、地獄に行きまふ。神さまに愛されているという事実を忘れてはなりません。神さまに大切に思われているという事実を忘れてはなりません。

「わたしの目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」これが神のことばです。この神さまの愛を知る時に、私たちは光を回復しまふ。「恐れ」は吹き飛びまふ。そして、平和が来まふ。神に愛されている、恐れることのない、平和が、御国の平和が、神の国の平和が来まふ。罪贖われた者だけが入ることの許される、天国が来るのです。天国が来まふ。

そして、神さまに愛されているのだから、この私も神さまに愛されている喜びと感謝をもって神と人を愛しようという、新しい人生が開かれるのです。